

考古学をやさしくしよう

佐 原 眞

はじめに

私が務める研究所の所長を長いあいだ務めていた坪井清足さんが、その職を去った。退官記念講演(1986年5月17日)の終り近くで、彼は、考古学の展示や説明を努めてやさしくすべきことを説き、奈良の正倉院展の説明も難解で、英訳の方が分りやすかったりする、という事例もかかげた。私の前に坐っていた年輩の夫婦も大きくうなずいて聴きいていた。「埋蔵文化財発掘三〇年」と題するこの講演のなかで、このくだりが、聴衆に最も感銘をあたえた、と私は思う。ただし、云うは易く行うは難しで、その坪井さん自身の話のなかにも、クロノロジーとかペダントリーとか、一般の人びとに難解な表現は何回も出てきた。「編年」、あるいは、むしろ「変遷」、そして「学者ぶる」と言いなおせば、誰にも分っただろうに。

田中琢さんは、近刊の『現代と考古学』(岩波講座日本考古学 第7巻 1986)の「総論——現代社会のなかの日本考古学——」でこう綴っている。

「博物館を訪れて説明を読んだとき、あるいは、各種報道や市民向けの刊行物などを見聞したり、現地説明会で話を聞いたとき、もう一つ別の問題があることを感じる。考古学用語の問題だ。研究の場における学術用語の必要性はいうまでもない。(略) しかし、現代社会との接点をもとめ、接点を多面的にもたざるをえない考古学では、そのために社会のなかでを使用することばと研究の場における学術用語の関係は、十分検討しておく必要がある。(略) これらの術語が考古学研究のなかだけにとどまっておれば、問題はない。しかし、十分な検討もなされず、解説もないままに、それが博物館や一般向けの刊行物に登場する。考古学の周辺には、このような特殊な用語を社会におしつけていて、それを当然とし、疑問をもたない雰囲気がある。(略)」

考古学の術語を完全に排除した説明や解説は不可能である。しかし、日常用語におきかえることのできる術語や解説抜きでは理解できないような術語をそのままおしつけることは、それを使用する世界が、あたかも隠語を使用する特殊な閉鎖社会のごとく、一般の社会とは隔絶したところであって、市民生活とは直接関係ない世界との印象を強める。いま、社会と考古学研究との間隙は、決して小さいものではない。その間隙をせばめ、両者の接

点を求め、そのつながりを強化しようとするとき、考古学研究に特有の学術用語を強調したり、それをおしつけたりすることだけは避けなければならない。……」と。

私もまた、考古学の成果をやさしく示すことを志している。それがなぜ大切かは、^{たく}塚の^{おたけ}雄叫びですでに明解である。しかし、その平易化運動を提唱するひとりとして、それを実践しているつもりの一ひとりとして、この問題について考えをまとめておきたい、と思う。話を具体的にするために、多くの実例をかける。登場願う方がたには失礼の段、おゆるしを願いたい。

学問の目的

「学問の目的は、分らないことを分らせ、難しいことをやさしくすることにある」この私の座右銘は、10年以上も前に門脇禎二さんと話している時に彼が口にしたものであって、先日、御本人に確かめたところ、門脇さん自身の言葉だそうである。私は、総ての学問に共通してかくあるべきだ、と信じている。しかし、この基本方針は、決して研究者に共有のものではない。なかには、分っていることを分りにくく、やさしいことを難しくするのが学問だという信条をいだいているのではないか、にみえる研究者もいなくはない。また、そうでなくても、学問をやさしくすることを必要と認めない研究者もいる。なくなった佐藤達夫さんも、そのひとりであって、私が、上の座右銘をとねえた時、一笑に付し、いや、笑いもせずに言下に否定した。学問は難しいものだ。関心をいだけば勉強し、勉強すれば次第におのずから分ってくる。分らない人は分らなくてよい。研究者の方から歩みよってやさしくする必要は、さらさらない。こういう趣旨のことを述べられたことを記憶している。これもまた、ひとつの見識であって、そう考えるのも自由である。

論文を書く時も、一般向きの文章を書く時も、術語(用語)・文体をいっさい変えない人もすくなくない。先日、檜崎彰一さんと話していたら、檜崎さんは、論文も一般向きも同じ文章・術語で綴る、といっておられた。これもまた、ひとつの態度であって、そう実行するのも自由である。

考古学をいまやさしくしなければならない理由

しかし、私は、考古学という学問について、分りやすくやさしくすることが特にいま、とても大切なことだ、と思う。

学問的究明の成果は、あるいは口頭で、あるいは文字で公けにされる。この公表には専門家向きの学会発表・研究会発表、報告書・論文・資料紹介によるものと、一般向きの講演会、普及書によるものがある。また、発掘現場における説明会や、展覧会・展示会、

博物館・資料館における展示がある。専門家向きの公表が、研究者としての義務であると同様、一般向きの公表は、恰好よくいえば、研究者の社会的責務に属している。

現在、考古学の公表は、専門家向きであれ一般向きであれ、ひじょうに難解である。私は、専門家・一般いずれを対象とする公表も全面的にやさしくすべきと思っており、このことは、埋蔵文化財を大切にするために、それを大切にすべきだ、という精神を広く一般の人びとのものとするためにひじょうに大切だ、と思う。実例をあげてみよう。

発掘現場で現地説明会がひらかれて人が群がっている。古代史や考古学のファン、あるいは、埋蔵文化財の重要性を認識してなんとかその遺跡を保存しなければ、と情熱を燃している人が、その群のなかにはいる。しかし、中には、特にそのような関心もいだかずに、なんとなく覗いた人^{のぞ}もいるかもしれない。あるいは、たまたま通りかかって、人が群がっているのを足を止めた人もあるだろう。

現場を発掘した若い担当者の声が聞えてくる。

「このドコウのマイドからカイユウトウキがケンシュツされました……」

古代史・考古学のファンは完全に理解するだろう。土壌の埋土から灰釉陶器が検出されたことが分るだろう。あまり知識がなくても文化財を大切に思う人は、何か重要なものがみつかったことを説明しているらしいことは理解して我慢して聞いているだろう。

しかし、問題は、野次馬的気分で覗いた人、たまたま、通りかかって足を止めた人である。彼らにとって、「このドコウのマイドは……」は、知らない国の言葉に等しい。彼は彼女は、あゝ学問とは難しいものだ、と足を留めたことを後悔して立ち去ることだろう。そして、次にまたどこかで発掘現場の説明会にでくわしても、二度と再び今後絶対、もう立ち止って聴き耳をたててくれないかもしれない。とすれば、難解な説明ゆえに、私たちは、文化財の味方になるべき人を、失うことになる。

仮りにその担当者が、仲間うちだけで通用する「隠語」を使わずに、思いやりをもって次のように説明したらどうか。

「この穴に埋っていた土から、^{うわぐすり}釉薬をかけた陶器がみつかりました……」それを機会に、文化財の味方が、一人、二人、いや何人かが増える動機になるかもしれないではないか。

曰く「トレンチ」・「グリッド」・「^{じやま}地山」・「^{いどう}遺構」・「^{へき}壁」・「^{ちゅうけつ}柱穴」・「^{そつこう}側溝」・「^{しゅたいぶ}主体部」・「^{ふくど}覆土」・「^{ひようさい}表採」「この面は生きている」…… 私たちが日常ふつうに使っている術語には、そのままでは、一般の人びとに通じないもの、辞書に出ていない語、出ていてもそれとは違ったよみで通しているものが満ち満ちているのだ。

術語をふりまわされる一般の人びとの迷惑は、私たち自身を被害者の側に立たせてみればすぐわかる。他の学問領域に一步でも近づけば、容易に被害者になれる。しかし、ここ

では喫茶店に入って一息いれることにしよう。私は、コーヒー党ではないから、「ミルクティー」と注文する。店員は「ミティー」と伝達する。ミティはミルク入り紅茶をさす術語なのであって、店の人びと、すなわち専門家のあいだで通用し、私、すなわち一般の人が待つ席に、誤りなくミルク入り紅茶が運ばれてくるのだから、それで良い。

いけないのは、「ミルクティー」と注文した時、「ミティですね」と確認する店員。これは一般に対する術語の押しつけであって、私たち考古学研究者が一般に向って「土^{まい}の埋^ど土」というのに相当する。しかし、ホット（ホット=コーヒー）、レイコ（冷いコーヒー）、レスカ（レモン=スカッシュ）等々の術語を客に向ってふりまわす店員のことを、考古学研究者の大多数は、非難する資格をもっていないのではないか。ちなみに、喫茶店の術語にも地方差があり、私のかかげたのは、近畿地方の用例。たとえば東京では、冷いコーヒーはアイス=コーヒーという。

術語は解説を加えて使う

話を具体的に進めよう。考古学をやさしくするための1つの方法は、

「ドコウというのは穴のことですが」とか「埋まった土をマイドとよびますが」とか、術語に解説を加えながら話すことである。当然ながら、最初に出てきたところで解説し、場合によっては二度目でももう一度付け加える。こうして話を進めれば、聞いている方は、術語を覚えてくれる。

もと、私の務め先におられたことのある伊藤延男さん(東京国立文化財研究所長)は、この方法を巧みに使いこなす人である。私どもの公開講演で、奈良の長弓寺か霊山寺の建築について話した時の彼の技術と思いやりとに私は感銘をうけた。正確には覚えていない。しかし、例えばこのような説明だった、と思う。

「この建物は、6間^{けん}×3間^{けん}の建物で、えー建築の方では、柱が7本並んでいると、その間の数をかぞえて6間^{けん}と申します。これは、1尺とか1間とかいうときの間とは違います。柱^{あいだ}の間が幾つあるかを示します。6間×3間というのは、つまり、長辺に柱が7本、短辺に柱が2本並んでいることです……」彼は、建物の規模について次に出てきた時も、簡単にこれを繰り返し、3回めからは、いきなり6間×3間……で通した。初めて「間^{けん}」を耳にした人も、彼の親切な説明で十分に理解し、この術語を学習したはずである。「桁^{けた}行^{ゆき}」・「梁^{はり}間^ま」についての説明も見事だった。

私は伊藤さんの講演の学術的内容について、いま覚えてはいない。しかし、その見事な説明方法はよく憶えている。なぜかという、そのすこし前、平城宮跡の現地説明会で説明にあたった新入社員がはりきって、しかも緊張して、「犬^{いぬ}走^{はし}り」・「塙^{せん}地^ち」・「版^{ばん}築^{ちく}」等々、

覚えてたの難解な術語をふりまわしていたのと、あまりにも鮮^{あざや}かな対照だったからである。

伊藤さんの講演以来、私は、この解説を加えながら術語を使う方法をつとめて用いるようになった。「堅穴住居」といいながら黒板にその4文字を書き図も描いて、「地面を掘り下げて作った半地下構造(この字も書く)の家ですが……」と。

宇治市教育委員会の杉本宏さんは、術語をなるべく使わず、使う時は必ず解説を加える、という方法で分かりやすい説明を見事に実践している人である。宇治大鳳寺跡の現地説明会で甚だ感銘を受けた。

耳で聞いて分る術語を

考古学をやさしくする方法のひとつは、耳で聞いて分る術語を使うことである。

音・訓^{おん くん}を連ねてよむのを重箱読み^{じゅうばこよ}、訓・音^{くん おん}を連ねてよむのを湯桶読み^{ゆとう}といい、忌み嫌われている。しかし、私は、体裁にこだわるよりも、術語はなるべく耳できいて分ることを大切にしたい。そのためなら重箱読みでも湯桶読みでもいとわない。たとえば、他の学問分野でいえばコウゴウセイよりもヒカリゴウセイの方がずっと光合成と分かりやすいのと同じように亀甲繫紋もキッコウケイモンよりキッコウツナギモンの方がいい、ではないか。

書き取りをしましょう。

トウリュウモン・モクヨウモン・モクヨウケイセントウキ・マイヨウ・ヨウセキ

概して音^{おん}を連ねたものは分りにくく、訓よみにすると分かりやすくなる。

豆粒紋・木葉紋・木葉形尖頭器・埋甕・窯跡は、マメツブモン・コノハモン・コノハガタセントウキ・ウメガメ・カマアトの方がずっとよい。マメツブモンなどといえば学術的ひびきが失われる、とはいえまい。そもそもマメツブに似ているから麻生優氏はこの名をつけたのだ。私は斧^{よこおの}を横斧・縦斧^{たておの}によびわけ仮名をつけて提唱した。しばしばオーフ・ジョーフあるいは、ヨコフ・タテフというよみを耳にすることがあって、とまどっている。

石川県で考古学協会があった時、坪井清足さんは、橋本澄夫さんの説明でハッセイキの古墳と聞いて、八世紀の古墳と理解し、説明をききつづけると、どうも古い古墳らしく、発生期と気がつく。誰や、まぎらわしい言葉を作ったのは、と叫んだら、隣りに坐っていた近藤義郎さんが、わしジャと答えた由。確かに同音異語の用語は誤解をまねく。この場合は、「出現期」におきかえられる。ケイシキ(型式・形式)もその実例だ[佐原「総論」『弥生文化の研究』第3巻 弥生土器 雄山閣 1986年 9ページ]。私は、土器のセイケイ(成形・整形)を成形・調整(これはよい語ではない)によびかえた。

難読の語には仮名を振る。しかし、仮名をふりさえすればよい、というわけではない。大阪府羽曳野市にある^{はびきの}陵南^{りょうなん}の森歴史資料室の展示あんない(1983年)は、色刷りで美しく、

笠井敏光さんの手腕はすぐれている。解説文に、すべて仮名がふってあるのも、思いやりのあらわれである。しかし、もともとの文章をまずやさしく書けば、もっとよくなったと思う。たとえば、

「狩りと漁り」

「日本列島がまだ大陸と陸続きの時に人類は生活を始めました。

土器がなく石器や骨角器を道具にしていた旧石器時代から、土器を初めて使用した縄文時代までは狩猟や漁撈による採集経済でした。

山野をかけめぐる鹿や猪を弓矢で狩り、森にある木の実や根を集め、海や川では魚や貝を取って食料源としました。」

は、このように書いたらどうだろう。あとはともかく、採集経済はむずかしすぎる。

「狩りと魚とり」

「日本がまだ島にならず、アジア大陸につながっていた時、人びとは住み始めました。石の道具(石器)や骨・角で作った道具(骨角器)しかなかった旧石器時代(何万年も前～1万2,3千年前)、そして、粘土で形作って焼き上げた土器を使った縄文時代(1万2,3千年～2300年前)、人びとは、自然の恵みを食料として生き、山や野でシカ・イノシシを弓・矢で狩り、森の木の実や草の根を集め、海や川で魚や貝を取ってそれを食べていました。」くらいではどうか。

録音を聞いてみる

私は、自分の話術が下手なことをよく知っている。録音をきくと特に「……という」を頻発するし、論理性、明快さがなく、その改善の努力はまだはらっている、とはいえない。

しかし、一度だけ我ながら模範的な研究発表をしたことがある。日本人類学会で2年前、「騎馬民族は来なかった」という発表をおこなったときのことである。発表時間は15分と定められている。最初に調べたのは、NHKのアナウンサーがニュースを読む速度である。兄がかつてその職にあったので、1分間に何文字の速さでよむのかをたずねたところ、300字だと分った。最近のアナウンサーは310字でいともいっていた。15分の発表だから300字をかけて4,500字、その原稿を書いた。そしてテープレコーダーできいてみた。耳できいて分らない言葉はないか。キョセイ。これは、普通は「虚勢」という意味で使う。しかし、私が使うのは「去勢」だ。したがって、「キョセイ、これは、動物の牡の辜丸を取り去って生殖能力を奪いとってしまうことですが」と注釈をつけることにした。こうして準備した私の発表の内容は、おそらく90%以上、正確に伝わり、よく理解されたはずである。残念ながら、この私の実験は一回に終り、その後は、実践におよんでいない。

学会・研究会で人の発表をきく機会をもつたび、私は、その内容もさることながら、発表技術・術語の使い方に特に関心をいだいており、たとえば、座長の席に坐ったりすると、発表者には、個人的にも、皆の前でも口うるさく注文をだすようになった。才媛小池裕子さんもその犠牲者の一人である。レイコウセイ 年齢構成は、年齢構成という方が一般に分りやすい、とか、「表題の「バイオマス」を解説してください」とか。ちなみに、彼女の話す速度は、400字/1分くらいの立板に水である。

『伊丹市史』の経験

『考古学ジャーナル』・『季刊考古学』……一般書店で売っている雑誌や普及書。これらは、一般読者も読むものである、ということを知りながら、それに投稿する考古学研究者の大多数は、不親切にも、術語をふりまわしている。考古学を勉強している者が読んでも、専攻分野が異れば立往生してしまうことがしばしばである。

文字で表現する場合は、口頭発表にくらべれば、すこし難しくなってもいい。耳から入ってすぐ消え去るのではなく、文字は逃げないし、目でみれば、豆粒紋・木葉紋もよく分る。しかし、だからといって、分らせるための親切心をもたなくていいわけではない。

私が一般むきの文章をやさしく書こう、と決意したのは20年前にひとつの動機がある。高井悌三郎さんのお薦めによって、『伊丹市史』の仕事にたずさわった。第4巻の資料編の一部を横田義章さんと共に書きあげ、本編の先土器時代から弥生時代までを一人で書いた。たしか4月のことである。市史編集室を訪ねたところ、見知らぬ若い女性がいて、そのひとが、私の書いた原稿にさんざん注文をつける。大学を出たばかりの彼女に、いわばケチをつけられた私は、日頃は円満で、1年に1ぺんぐらいしか腹をたてない(このごろはそうでもなくなった)のに、いささか不機嫌となり、編集委員の先生に文句をいわれるならばともかく、貴女にそんなこといわれる筋合はない、というような言葉を発したはずである。その時、彼女がいった一言こそ、私を目覚めさせたのだった。

「先生、私が分らない、ということは、伊丹市民が分らないということです」

これには参った。彼女のいう通りだ。いくら考古学の世界で重要な内容であっても、それを噛みくだくことなく、難解な表現で書けば、それこそ思いやりのない、市民とは無縁な市史が出来上ることになる。私は脱帽して、彼女の一語一語に耳を傾けて、全面的に手をいれなおしたのだった。

成功しているかどうかはともかく、私はそれ以後、分りやすい文章を書くように務めはじめた。そのために谷崎・川端、本田勝一……数々の文章論もよんでいる。

商売がら、マスコミ関係諸氏とのつきあいも多い。銅鐸の型式分類について、私の方は

最古・古・中・新段階とかⅠ～Ⅴ式とかを使うようにしても、記者氏はガイエンツキチュウシキ等と使っている。逆ではないか、とたしなめることしばしばである。

飛鳥資料館の展示

11年前、私は、私どもの研究所に付設された飛鳥資料館でその開設準備に係わることになり、開館にいたるまで、展示およびカタログ作成の直接の責任者となった。飛鳥時代、飛鳥地方は、その歴史を識る人にとっては、興味の尽きない時代・地方である。しかし、それを識らない人びとにとって、あるいは小学生・中学生にとっては、難解である。初心者にも分かり易い博物館を作ることは断念せざるをえなかった。しかし、展示方法については、ものを立てた状態で置くなど、それまで国の博物館が試みなかった新手法を採用できた。坪井清足さんのヨーロッパの博物館学習の成果によるところも大きく、新しい展示をめざす国友俊太郎さん（日本エキジビジョン企画）に負うところも大であった。その後、京都国立博物館の展示の一部に八賀晋さんが、京都市立考古資料館に田辺昭三さんが、このヨーロッパふうの展示を採用している。そして現在では、千葉県佐倉の国立歴史民俗博物館が新しい方法を採用しているし、全国各地に新手法をみる。また、これと別に国立民族学博物館の展示方法はひとつの模範となっている。

説明は200字でおさめることにした。これは2つの理由による。200字あれば、書きたい内容はなんとか盛りこんでまとめることができる。200字ならば、読まされる方も我慢できる。私は、苦手な自然科学関係の展示をふくめ、幾つかの展覧会や展示をみて歩き、自分自身も読んでみて、また、他の観客が読む様子を観察した。500字とか800字とか沢山書いてあれば、最初から読む気もおきないし、読まずに通るすぎる人が大多数となる。

悩んだ表現がある。「検出した(された)」,「出土した」,「発見した(された)」,どれも硬いのだ。だからといって「みつかった」は俗っぽい。学術的な品位が失われる。しかし思い切って「みつかった」にした。今では、文章のなかでも私は平気に使うこの表現も、初めは抵抗があって、なかなか踏み切れなかった。

さて、飛鳥資料館が開館したのち、私は初めて、ヨーロッパを訪問する機会をもつことが出来た。そして坪井さんの話や写真でかねてから知っていたものの、博物館の展示方法、展示についての基本姿勢に、いたく感銘をうけたのであった。実例をひとつだけあげて日本と比べておく。

日本の博物館 vs. デンマーク国立博物館

ビロードの下敷の上に、シカの枝分れの部分を利用して作った釣針が並んでいる。その

説明札(「^{だいせん}題箋」)には、「鹿角製釣針」「縄文時代晩期」「宮城県……貝塚」と書いてある。これが、東京国立博物館以下、日本の博物館・資料館の展示・説明方法の典型である。私自身が関わった奈良国立文化財研究所平城宮跡資料館および飛鳥資料館の展示も例外ではない。

しかし、日本人が「鹿角製釣針」が何を意味するか理解できるようになるのは(たとえロッカクセイツリバリと発音できなくても)、いったい何才だろうか。小学4年生? 5年生? それとも中学生?

デンマーク国立博物館の展示をみることにしよう。ケースの向うの壁に魚が泳いでいる写真が貼りつけてある。その前に、^{テグス}釣糸で鹿角製釣針が3つ4つ下げている。

デンマークの子供が釣針という単語を何才で習うのかは知らない、しかし、この展示方法だと、たとえ単語は知らない3才の子供でも、お父さんと釣りについていった体験さえあれば、これが何かはすぐ分る。

弓矢や槍のところには、シカの影絵が描いてあり、その体を中心として同心円がいくつも描いてある。^ま的としてねらっていることがすぐ分る。これは遊びである。しかし興味をひき理解をたすける。私は、一般市民のための展示は、デンマーク式であるべきだ、と思う。

学術知識の押しつけ

青銅製腕輪と書けばよいところを銅釧と書くのは学術用語の押しつけだ。北海道の釧路を思いだしてドクシとよんだところで何のことか分らなくて当然だ。せめて、「青銅製腕輪」と書いたあとに小さく「^{どうくし}銅釧」とカッコに入れて記しておくていどの親切心がほしいところだ。

最たるものは、馬具の部品名。^{かがみいた}鏡板・^{ぎようよう}杏葉・^{うず}雲珠。そもそも、博物館の展示に、これら馬具の名称や、^{せきぞく}石鏃などという用語は必要なのか。一般市民1000人が来館し、そのうち何人までが求めるか、を念頭において展示し、説明をつける。そうでなければ、およそ市民不在の博物館のそしりをまぬがれまい。馬具のこまかな名称よりも、古墳に葬られた身分ある人物が、身を飾りたてるだけでなく、馬まで金ピカに飾って偉らさを誇示したという説明の方が大事だし、縄文時代には弓矢を使って鳥や獣をとり、矢の先に石器をつけたことが分ればいい、と思う。馬具の名称や矢の先につける石器の名称を知りたい見学者には、別の対応の方法がある。

私の銅鐸型式分類の型式名もまた、あちこちの博物館・資料館で採用されている。大変光栄なことだけど、いつも首をかしげてしまう。市民1000人のうち、菱環紐式・外縁付紐式……という型式名を必要とする人は一人もいまい。初めは音を聞くためのカネで、実用

的な吊り手をもっていたが、のちには、にぎやかに飾り立てて見るためのカネとなり吊りさげるのに不必要な飾りが吊り手に加わった、聞く銅鐸から見る銅鐸に変わった、と説明するだけで充分だろう。

縄文時代中期加曽利Ⅱ式だろうがⅢ式だろうが勝坂式だろうが、中期か前期かさえも、一般の市民にとってはどうでもいいだろう。何年前で何に使ったのか、紋様はどんな意味をもったか、こそ一般の人の求めである、炭素14年代で何年前とか、煮炊き用とかの説明の方が大切だ。どうしても書きたいなら型式名は、小さく書けばよい。土器型式名を表示した「編年表」は1000人中おそらく1人も必要としない。研究者仲間における重要な面白い関心と、一般市民1000人の関心とは当然くいちがう。市民のもともめているものは何か。これについて学芸員たるものはつねに念頭においているべきだ、とおもう。

「邪馬台国への道」展

1980年、岡崎敬先生代表の倭人伝の道研究会が「邪馬台国への道」展を全国数カ所で開催した。私はその監修委員なる肩書をいただいた。展覧会の初日から1週間ほど前だったか、朝日新聞の西部本社から電話があった。会場の説明板の説明が学術的すぎて難解、素人に分りません、という苦情である。私は、岡崎先生に電話して、説明文リライトの役をかってでた。最初にリライトしたのは、岡崎先生の説明。倭とは何かが分っている人しか分らない文章。私は、「2000年前、中国では日本を「倭」とよんでいた」という文章から書きはじめた。西谷正助教授の楽浪土城の説明には、木槨墓・埴槨墓・封泥などの術語が続発。私は、木を組んで作った墓(木槨墓)、レンガを組んで作った墓(埴槨墓)と書きあらためて、封泥は消した。こうして全面的にリライトした文章は、朝日の人を満足させ、会場に配置された。岡崎先生を初めとする研究者各位の文章は、学術的に立派で非のうちどころなく、格調高いものだった。しかし、あまりにも学術的すぎたのだ。あのままだったとしたら、最初の1、2枚をみて、見物者はのこの説明をみなかったことだろう。

後日、岡崎先生から、ねぎらいの言葉をいただいた。「西谷君がやるべき仕事をやっていただいて……」と。

数年前、渡辺正気さんの退官を前に、福岡県立九州歴史資料館は大規模な青銅器の展覧会を開いた。会場には、よくもこれだけあつめた、と驚くほどの青銅器があつまっていて、たまたま会場でおめにかかった三木文雄さんは、大いにほめ、「東博(東京国立博物館)でも出来ないほどの展覧会だ」とほめちぎっていた。

私は、弥生時代の青銅器を勉強の課題のひとつにしている。その私にとっては本当に有難い内容で本当に為になった。しかし半分の私は醒めきっていた。あまりにも一般市民不

在の展示だったからだ。私は思う。たとえば、県立の博物館・資料館ならば、特に考古学に造詣^{ぞうけい}も関心ももたない一般の1000人の観覧者を念頭において展示する。1000人のうち何人が分かるか、何人が関心をもつか、をつねに考えて展示品をえらび、解説を書く。1000人のうち980人にとってむずかしくて分からないならば、県民不在の展示といわれても仕方あるまい。

いま、「耶馬台国への道」展を企画実行した人びとは、福岡国立博物館の実現にむかって情熱をもやしている。博物館等建設推進九州会議は、『文明のクロスロード MUSEUM KYUSHU』という季刊誌を発行している。私も毎号受贈しており、多くの人びとの情熱と学識とが伝わってくる。一般市民へのサービス・思いやりが加わることによって、理想的な博物館が生まれることを期待したい。

神戸市立博物館の展示

私は、神戸市立博物館の協議会委員をしていて、年に1、2回、その会議に出席する。2年前私は意を決して、5分ほど協議会の席上で展示について話させてほしい、と前もってお願いし、また学芸員諸君も時間を割ける人はきいてほしいと注文。皆の前で、日本式、デンマーク式の展示のことも話した上、展示をやさしくすべきことをぶった。

具体的に最初にやるべきこととして、まず神戸市立博物館の「袈裟^{けさ}繡^{すきもん}文銅鐸」という説明を「銅鐸」だけにすべきだと提案した。銅鐸だけでも一般市民にとって必ずしも容易ではないのに、その前の4文字は難解そのもの、しかも袈裟繡文が何かの解説はついていないからだ。

博物館長・副館長、そして協議会委員として参加している中学・小学校の先生方からは拍手がおこった。しかし意外なことに、協議会委員のお2人から異見がさしはさまれた。A大学のB先生曰く。「袈裟繡文銅鐸」は、指定名称です。かんたんに略せません、という内容だったのには驚いた。この博物館が陳列する桜ヶ丘銅鐸14個は国宝であって、国宝として指定された正式の書類上、「袈裟繡文銅鐸」の名が掲げてある。だから、この名を使わなければなるまい、という判断である。このような指定は、文化庁のあずかるところであって、その文化庁直属の機関に属する私が、難しいから簡略にしよう、と提案しているのである。それに対して、象牙の塔にこもって学問の自由を謳歌^{おうか}している先生が、「指定名称だから」と危惧^{きぐん}の念を示されたのである。私がなおも主張すると、「文化庁はそうなまやさしくありませんヨ」。「文化庁には私が話す」と売り言葉には買い言葉。ちなみに、その後、私は、文化庁美術工芸課の考古学担当の三輪嘉六技官にこの点でたずねたところ、指定名称を使っていないところもありますから、と「銅鐸」でもかまいませんという答を得た。そして、さらに、つい最近、山本信吉美術工芸課長にも、その点を確かめた。なる

べく指定名称を使うように、おすすめはしていますが、強制はしていません、という答を得、その内容をこうして印刷することの了解も得ている。

説明容易化の提案に異見をのべたもう一人はC大学のD先生である。展示の説明はやさしすぎてはいけない。ある程度むずかしい方が向学心を育てる。高校生が分る程度がよい、という内容だったと思う。協議会のあとで、D先生が話されたところによると、「高校生が分る程度という意見は、松下隆章先生のものです」とのことであった。長らく東京国立博物館に務めた人、かつての私の研究所の所長であり、京都国立博物館長を務めた人の名がはからずも挙げられた。私はこたえた。「日本の義務教育は中学までです」。市民のための博物館は、基本的に、中学を卒業していればなんとか分る内容・解説をもたなければならない。

その後、神戸市立博物館は、私を招き学芸員諸君を前にして、私の考えをじっくり聞く機会を作ってくれた。私は、学芸員たるものは、学者で偉いんだという気位はすて、サービス業であることを自覚すべきことを説いたつもりである。

1987年1月、春の協議会が開かれた。その当日現在、銅鐸の説明は、依然として「袈裟纏文銅鐸」のままである。

向日市文化資料館の展示

向日市の山中章さんは、文才に恵まれた人である。それだけでなく一般市民へのサービス精神にあふれた人である。それは彼が作ったガイドブック『長岡京跡』其の三 長岡京物語(京都乙訓ライオンズクラブ 1983年)をみればよく分る。

その彼が、新設の向日市文化資料館の展示に係わることになった。私のところに意見をもとめに来て来た時は、一般庶民・下級官吏と貴族の男女の人形を作る方針が決っていた。その人形のそれぞれに名前がつくことになる。彼と清水みきさんとが、一般庶民の人形につけた名前は、^{たみのとくな}民得名、長岡京からみつかった木簡に出てくる名前だ。説明をみることにしよう。私の意見も多少入っている。

「^{たみのとくな}民得名 年齢33才 751年(天平勝宝3)生まれ 出身地福井県坂井郡三国町(越前国坂井郡川口郷)九頭竜川口の村。現住所 長岡京右京八条三坊十三町(現乙訓郡大山崎町円明寺)の2間×3間の飯場に仲間と居住。家族 郷里に老父母・妻・子4人を残す(単身赴任) 職業 都づくりの土木工事。行き帰りの旅費自弁で一年契約で上京。給料 雀の涙。食糧支給。エピソード 魚釣りが得意で、故郷の川で夕食用の魚を釣っていたところ、突然、郡役所の人々が来て「お前、穴掘りが得意だそうだな、都で人手が足りんから、明日すぐに発て、」といわれて、着の身着のままやって来た。この労働着は役所の支給品であ

580

る。郷里の家族は重税にあえぐ。」

いま見ると、この説明は300字。あと100字は減らしたい。「2間×3間の飯場」は、「小さな飯場」がいい。しかし、精神として、これは市民のための資料館の説明になっている。

市民のための博物館・資料館を作るためには、博物館学の学習や学芸員の資格習得以外のものが必要である。それは、考古学を市民の言葉で市民の関心をひく内容で語り一般市民に分ってもらおうという基本的精神をもつことである。

デパートのショウウィンドーの飾りつけは、気づかぬうちに奥さま・お嬢さまの足をとめる。TVの金かけたコマーシャル、新聞、雑誌の広告欄…… いかに見る人の心をとらえるかは、学識内容のつまった高度な専門書からではなく、商業デザイナーの手腕から学ぶことが出来る。また、いかに読む人の心をとらえるかは、これらの広告の横に綴られている「コピー」に学ぶ点が多い。その気で注意を向けると私たちの周囲は、分りやすく面白く人をひきつける展示の解説のお手本だらけなのである。迎合せよというのではない。分りやすい形・言葉で示すべきだ、と説いているのだ。

現在と結びつける

一般市民が興味をひく形で示す。そのための一法は、いまと結びつけた解説・展示法である。考古学が扱う時代は大昔、今とまったく関係のない過去のことだ、ということであれば、考古学ファン・古代史ファン以外は、のってこない。だから、何かいまと結びつけてみる。

その実例は、さっきかかげたデンマーク国立博物館^{まど}の的。これは銃の標的だから実は石器時代とは関係がない。しかし、シカに標準を合せた状況で的を描くことによって、投槍・弓矢の理解は、ずっと今に近いものになる。

もう1例は、上にあげた向日市文化資料館の解説。「単身赴任」という最もナウイ現実が大昔の庶民をぐっと現在に近づけた親しみがわいてくる。

縄文土器で「深鉢^{ふかばち}」とよび、弥生土器で「甕^{かめ}」とよぶものは、煮炊きに使うものだから、今の台所用品でいえば、鍋や炊飯器に近い、一般向きの説明ならば、そうよんでもいいではないか。貝塚のことを「ごみため」というと、後藤和民さんは御機嫌が悪い。しかし、いまある何かと比べるならば、やはり、ごみためが一番分りやすいではないか。

土器の解説なら、現代の食器・鍋などとくらべてみる。役所の説明なら「官衙^{かんが}」・「官人^{かんじん}」などよばずに役所・役人でとおす。山中敏史さんは、奈良時代の役所について、現在の県庁や市役所との比較から語り始めている（山中敏史・佐藤興治『古代の役所』古代日本を発掘する第5巻 岩波書店 1986年）。猪熊兼勝さんは、奈良県明日香村の石神遺跡^{いしがみ}の説明

で「迎賓館」だ、と云っている。朝鮮半島やトカラ島から来た人をもてなした場であることが書紀に出てくるからだ。伐採の話ならば、弥生時代以来の森林破壊が植相を変えたことを現在の環境破壊の出発点として説明する。弥生時代以来戦争が始まったという解釈は、「世界最終戦争」をおこしてはならない、という最も現代的な大問題と結びついてくる。単なる術語であっても現象・内容的なことであっても、いささかでも今と関連させることによって、文化財が今と無縁ではなく現代と結びつくことを示すことによって、考古学は一般市民にとって親しみのあるものとなるのではないか。

現在と結びつけることとともに、もうひとつの方法は、身近な実例と比べる方法がある。たとえば、「相対年代」・「絶対年代」の説明は、人の年齢をいうとき、福山さんより樋口さんは若い。中谷さんは杉原さんより上だ、というように他人の年齢とくらべていういい方もするし、福山さんは80代、佐原君は54才、富田さん・杉江さんは花も恥らう20代というように数字で表現することもある。考古学も、他の年代とくらべて年代をとりあげる場合と、何年前と具体的な数字であらわす場合がある、というふうに説明すればよい、とおもう。

現在との係わりで、一般市民にうったえ、理解を求めるべき一番大切なこと。それは今、遺跡がどんどんこわれていく現状を伝え、保存への理解をもとめることである。

展示・口頭発表・印刷による発表の際、こんな珍しいものがみつかった、こんなことが分った、と伝える際は、文化財壊滅の危機、保存の大切さをうったえる絶好の機会でもある。このことを考えるとき、すぐ頭にうかぶのは、1975年秋、ドイツでみた展覧会のことだ。

ケルンの芸術会館で「古い世界の新しい姿——ドイツ連邦共和国における1945年から1975年にいたる遺跡・遺物の保護と発掘——」という展覧会をやっていた。主催はケルン市立歴史博物館。共催は連邦州立博物館協会。私が特に関心をいだいたのは、「日本考古展——考古学・この25年の歩み」(東京国立博物館 1969年)を思い出したからだ。戦後日本考古学の優品をならべた東博の展覧会と同じように、戦後ドイツ考古学の成果が一堂に並ぶ展覧会。どんなにすごい内容か、と期待をいだいて会場へ向った。そして内容の差に目をみはることになる。

1階は、考古学の方法の展示。水中考古学、ボーリング、空中写真、写真測量、発掘器機、獣骨の扱い、土器・ガラス容器破片の接合、ローマ時代コンクリートの資料試験、X線、金属器修理、古植物学、年輪年代学、花粉分析、炭素14年代等々、新旧おりまぜた各種の方法を実物やパネルで説明。発掘器機では、大きなブルドーザーまでならんでいた。

2階への階段には、「過去への理解を！」「過去は生きている。大昔の人びとにさらに大きな関心を！」と訴える。

そして階段を登りきると、オートスライドで文章とカラスライドとが交互に出てきて遺跡破壊の現状をうたっている。今から11年前の話。現在ならビデオを使うところだろう。このオートスライドの前は人ばかりで、ほとんどの客は、これを見終ってから会場に入るのであった。

会場そのものは、簡素な作り。板を切ってまにあわせの台を作って並べるだけ。金はかけていない。しかし、各時代について、それぞれ代表的な遺物が並んでいた。優品もあった。

会場を出ると、そこにはまたオートスライドがあった。入口のとは違う内容。展示品をみたあとで再び、いま、埋蔵文化財はいかにこわれていっているか、何とか守らねばならない、とうたっているのだ。効果的だと思う。ほとんどすべての観覧者は静かに見て、そして出ていくのであった。「日本考古展」とのあまりの違いに、私はしばらく動けないままであった。今11年を経て私は、解説書をめくらないと並んでいたものを想い出せない。しかし、戦後ドイツ考古学を総括する展示にたいするドイツ考古学研究者の基本的な姿勢から受けた感銘は今なお冷めやらない。

『ひと もの ところ』

『ひと もの ところ』という図録が天理大学付属天理参考館から出版されている。いままでの展示品図録の枠をやぶっており、美しい原色写真についた説明は2つからなり、第1の説明は大きな文字で一般向きに、第2の説明は小さく専門家向きになっている。

実例をあげると、

第1の説明	第2の説明
つり手のついた壺	せいどうこくもんていりようこ 青銅刻文提梁壺
彩色のある四角い壺	せいどうさいがぼう 青銅彩畫鈎
ぬ 金銀を塗った酒入れ	と きんぎんどうほうおうしゆそん 鍍金銀銅鳳凰酒尊

従来この種の解説では、この第2の説明しかなかったのだ。

この図録では、解説文を考古学研究者の座談会でまとめるという新機軸もあみだしている。もの(収藏品)よく、ひと(参加した考古学研究者そして写真家)を得、そして何よりもところ(編集の基本方針、読者への配慮)にすぐれ、近來になく感心させられ、うなってしまう。『ひと もの ところ』は、光っている、近江昌司さん・金関恕さんたちに敬意を表したい。なお、いま、『ひと もの ところ——天理大学付属天理参考館蔵品——』の第1期第1巻 漢代の銅器・陶器(天理大学・天理教道友社共編 1986年)だけを取りあげたが、第1期第2巻 韓国の民俗、第3巻 画像埴、第4巻 殷周の文物以下同じ方針で編集されている。

おわりに

数年前、私は、小学館の学習漫画『人物日本の歴史』第1巻縄文人の暮らし、第2巻卑弥呼の2冊ととりくんだ経験がある。分っていること、未解決のことを、どう分りやすく説明するか、について、これほど勉強になったことはない。私は、これから、いかに易しく学問の成果を一般市民に還元するかに挑戦するつもりだ。

1985年秋、美術館・博物館連絡協議会が私どもの研究所でひらかれた。東京・京都・奈良国立博物館を始めとする国立の博物館・美術館の次長・学芸課長・庶務課長などがあつまる会議で、私どもの飛鳥資料館もこの協議会に属している。所長不在・センター長不在。私が研究所を代表して挨拶する。その機会に、私は、説明をやさしくして真の国立の博物館にしよう、という私見を開陳した。しかし、いならぶ国立の博物館の幹部からは、当然予期されることながら、なんの反応もなかった。いま、私のいる研究所では平城宮資料館を改装中であって、私の同僚、というより若き世代の人びとは、いかに分りやすくするか、に挑戦している。

以上、読みかえしてみると、展示についての記述が多くなってしまった。しかし、今ここでとりあげている展示・口頭発表・出版は、学術的成果を人びとに普及還元するためのもの、という点で共通しており、手段・方法が違うに過ぎない。だから展示で述べたことは、ほかの2つにもあてはまることが多い。私は、図・写真の材料をあつめて印刷物のページにこれを配列する機会ごとに、展示ケースにもものを配列することを連想する。

文化財が国民共有の財産であって、それを大切にしなければならないという国民共有の認識を高めるために、いま、私たちは、考古学をやさしくしなければならない。という私の考えを分りやすく伝える手段として、多くの事例をあげた。ひきあいに出した方がたにもう一度お詫びしておきたい。

京都府埋蔵文化財調査研究センターは、その成果をいろいろな形で一般府民にも明らかにしている。センターの若い頭脳が簡明な面白い説明で、埋蔵文化財を府民のものにするための努力をはらうために、この一文がいささかでも刺戟となれば幸いである。わがセンターの展示会の名は「小さな展覧会」。誰がつけたか、この名はいい。次回の展覧会から、どんな説明がつくのか、期待と不安あいなかばしてみまもりたい。最後に、杉原和雄氏の御助力に感謝する。

(佐原眞=奈良国立文化財研究所 埋蔵文化財センター研究指導部長・当センター理事)

追記 遺跡や遺構に人の入った写真をとろう！ 記念撮影的なものでなく、遺構の大きさや深さを分らせるために。展示用に普及印刷用に。市民に親しみをもたせるために！